第176話　本町域の私塾・寺子屋⑤　中山町歴史散策

佐東家彦右衛門塾

佐東家は、東根より土橋村に移住したといわれています。やがて百姓となり、宝暦11年（1761年）にはすでに土橋村の名主として数々の功績をあげ、中でも8代昌綱、9代直治、10代昌春ら歴代当主は、郷土の子弟の教育に熱心でした。その中で最も頭角を現したのは11代昌治です。

天保9年（1838年）4月に生まれ、嘉永4年（1851年）に米沢藩士有江静山の塾に入門し、漢学や書法を学び始めます。しかし、安政3年（1856年）、父の急病で帰郷することになります。その後、父の死を看取って佐東家を相続、やがて土橋村の名主となりました。

昌治は漢学、書法に優れただけでなく、俳諧に親しみ号を素白と称し、長崎の弥右衛門岩月、谷地の槙緑峰、漆山の半沢二丘（にきゅう）などと親交を深め、土橋の月山神社の俳額に名を連ねているほどの俳人でもありました。

のちに、父の遺志を継ぎ、村内の子弟の教育に情熱を注いだ昌治の功績や人柄を偲ぶ酬恩碑が、土橋村の南口（姥様の石像近く）に建立されました。

この酬恩碑の碑文には、「昌治は人からの頼みはおとなしく引き受け、周りの意図を汲み取れる人柄だったこと。役場が岡村に移ってからは田作りを仕事とし、時間がある時は、句を読み、囲碁や将棋を嗜（たしな）んだこと」などの刻字があります（本文割愛）。

佐東昌治酬恩碑

※引用　中山町史　中巻　第10章第2節　教育

私たち地域おこし協力隊です！ No.44

こんにちは、地域おこし協力隊の稲垣です。去年と変わらず雪の多い柏倉家の除雪作業は猫の手も借りたいほどでした。猫と言えば、私が着任する前の話ですが、九左衛門家のカッテの天井裏には子猫が住み着いていたそうです。今はもういませんが、こうした茅葺屋根の農家の屋根裏に住み着いて子育てをする野良猫を棚木猫（たなぎねこ）と、また、火を消した直後のまだ温かいカマドに入っている飼い猫を竈猫（かまどねこ）と言います。

県内某所で見つけた
令和元年の草木塔

猫をはじめ、九左衛門家にはたくさんの動物が飼育されていたそうです。犬や猫などのペットをはじめ、ニワトリや豚、さらに毛を刈り取るための羊やアンゴラウサギも飼われていたそうです。特に羊は近代になってから羊毛を得るため農家に飼育が奨励され、東日本の多くの地域で飼われました。以前、記録を見た岩手県の古民家では、馬がいなくなってから馬小屋で羊を飼っていました。惣右衛門家でも昔馬がいた時期があったそうですが、今はその名残はありません。

こうした牛馬や蚕（かいこ）など生活に深く関わる動物の中には死後にお墓を建てて弔うこともありました。山形県は古い時期の草木塔がたくさん残されている地域です。なぜわざわざ動植物を供養するのか。草木が芽吹く春目前、供養塔を作った人々に思いを巡らしてみると、いっそう温かな日々が訪れるかもしれません。

●協力隊への問い合わせ先●　伊藤 ☎662−2114（産業振興課）／ 稲垣 ☎662−2235（教育課）